福祉用具による
介護力の活用と
利用者の自立支援について

気仙沼保健福祉事務所
成人・高齢班　廣島　志保

気仙沼圏域の現状

25.3末	人口	高齢者率
気仙沼市	68,502	31.9%
南三陸町	14,977	29.9%
計	83,479	**31.6%**

【実地指導等による聞き取りから】

◆震災の影響による職員入れ替え（経験のない職員の増加）

◆訪問介護事業所の運営を継続するために**居宅支援事業所廃止**

◆介護支援専門員不足による新規利用者の受け入れ困難

◆通所事業所の新規参入増加により**人材が分散し，確保に苦慮**

住み慣れた地域での
障害児者・高齢者の生活を支援する

介護職　家族

「介護力」の活用

介護職員等の離職の原因
家族の負担になる介護

身体的負担に着目

「**移乗介助**」

車いすやベッドからの乗り移り介助

介護の現場で行われている移乗介助

←一人介助

二人介助↓

ほとんどが「抱え上げ」

職場での腰痛

平成23年腰痛の発生件数4, 822件

（休業4日以上を要するもの）

社会福祉施設：19%を占める

業種別分類でNo.1

：10年間で2. 7倍に増加

腰痛発生の半数は乗り移りの介助（移乗介助）

※厚生労働省（2013）
『職場における腰痛予防対策指針の改定及びその普及に関する検討会報告書』より

技術があれば，抱え上げの負担は減る？？？
専門職だから腰痛にならない？？？

厚生労働省
「職場における腰痛予防対策指針」
（平成25年改訂）

全介助の必要な対象者には，**リフト等を積極的に利用すること**とし，**原則として人力による人の抱え上げは行わせないこと**」

リスク回避

①福祉用具の積極的利用
②対象者の状態にあった車いすやリフト等の利用

３ステップでの取り組み

移乗用リフトなどの
福祉機器を知ってもらう

福祉機器の
使い方がわかる

実際に
活用してもらう

ステップ１

体験・実感

①研修会実施

ステップ２

使用技術習得

②施設へのモデル事業
（機器の貸出・研修会）

ステップ３

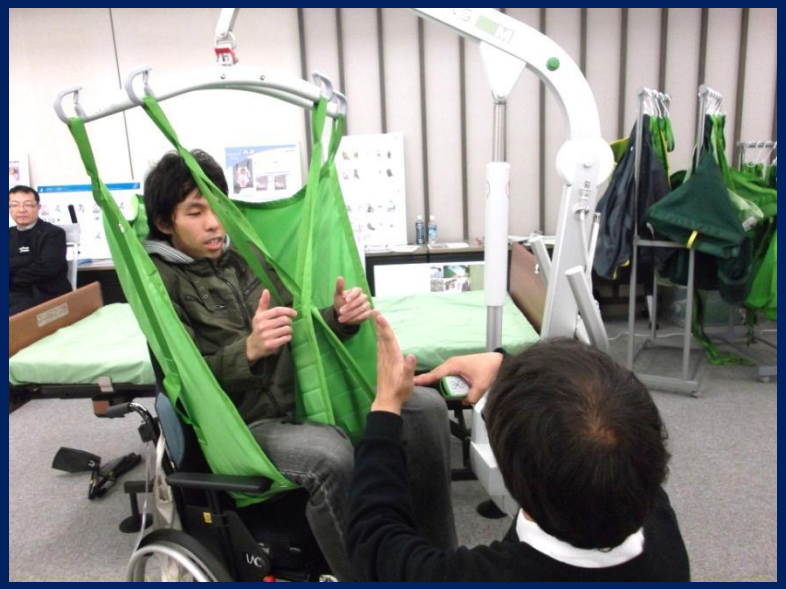
実践・活用

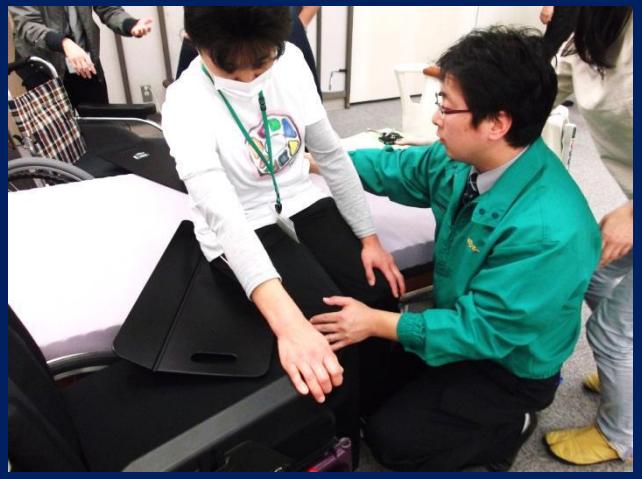
③在宅支援
（リハビリテーション相談）

「抱え上げる」介護技術の重視

「危険」「使いにくい」「難しい」イメージ・「実物を見たことがない」

①地域ケア関係者への研修事業





ステップ1
体験・実感

ステップ2
使用技術習得

対象者

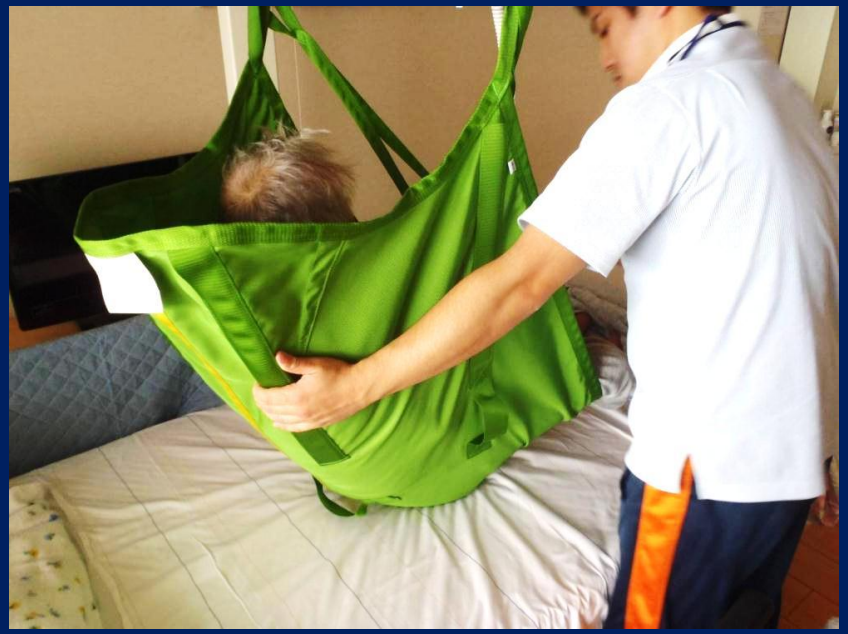
リハビリテーション専門職・介護支援専門員（ケアマネ），
訪問看護師，訪問介護員，福祉用具業者，

②高齢者施設でのモデル事業

ステップ2
使用技術習得

３ヵ月間機器の貸し出し（移乗用リフト・車いす）
職員研修の実施

NPO法人日本シーティングコンサルタント協会
県介護研修センターの協力



③在宅での個別支援
（リハビリテーション相談事業）

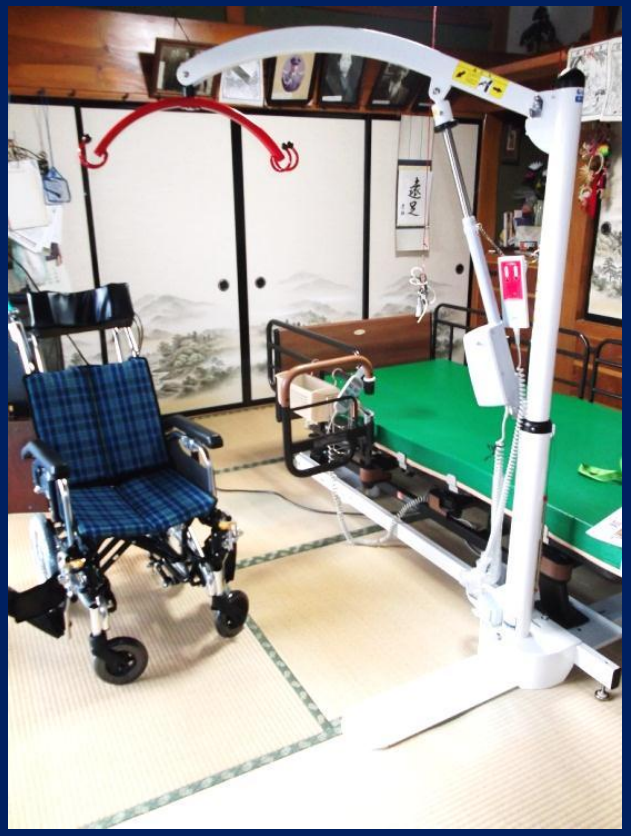
ステップ3
実践・活用

◆ 自宅環境・
介護力の評価

◆ 介助方法の検討

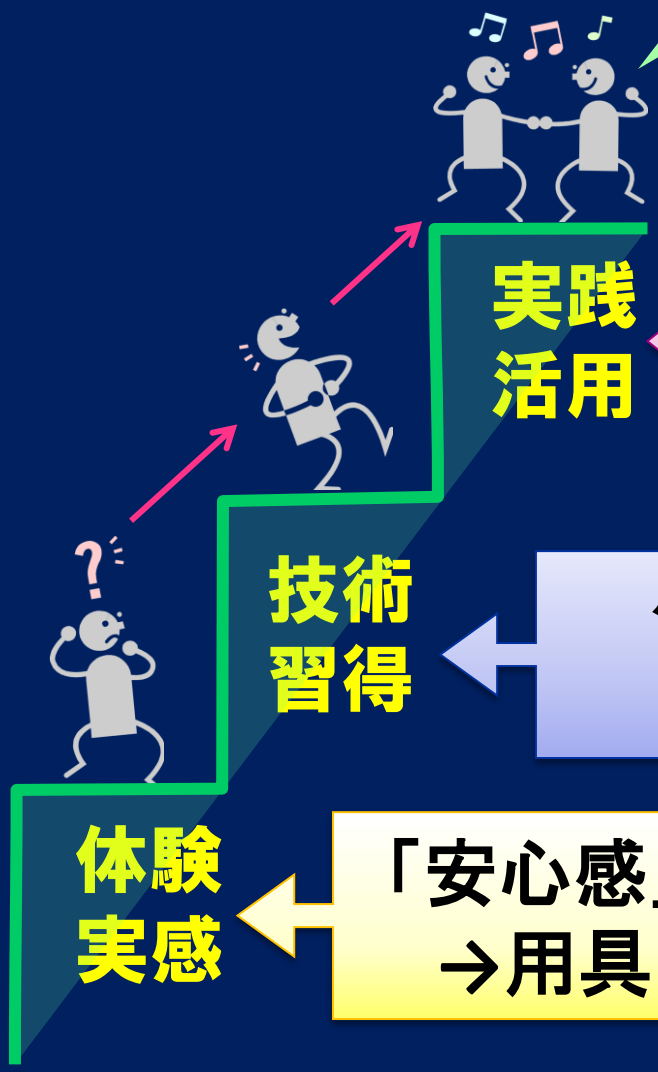
◆ 利用者に合った
福祉用具の選定

◆ 使い方の指導



結果・考察

共通点
- ◆ 関係スタッフに事前に研修等で機器を体験，使用していた
- ◆ 家族による活用



実践活用

研修成果が実際の活用に直結

研修前 ０件 → 研修後 ４事例

技術習得

ケアスタッフがすぐ使える
同じ方法で家族指導が行える

体験実感

「安心感」「効果」を実感
→用具の導入が選択肢に入る

介護職，家族の
移乗介助の身体的負担を軽減する

福祉用具導入・活用等の環境整備

人材確保

介護の担い手を守る
地域の人材の有効活用

自立支援

利用者へのメリット

- 自宅で入浴できる，
- ベッドを離れる回数が増える，
- サービスに縛られない生活ができる 等

課題

◆機器使用の抵抗感

面倒　介護は人の手によるもの

◆リハ専門職でも乏しい使用経験

◆障害児者

→「基準額」が実際の価格と解離

15万9千円　40～50万

中古品で代用　多額の自己負担

まとめ

圏域では介護･看護職の深刻な人材不足にある現状から，家族も含めた現在の「介護力」を有効に活用するために，移乗介助に着目し，福祉用具の活用を図る研修や技術支援に取り組んだ。

福祉用具の活用

状態に応じた
選定

＋

使用技術の
提供

多職種・多機関との
協力・協働

**相談事業を活用した在宅での
実践的な技術支援**